

開催地名：愛知県尾張旭市	
開催日時	令和3年2月12日（金） 13:30～15:00
開催場所	尾張旭市役所（オンライン開催）
語り部	伊藤 正治（岩手県大槌町）
参加者	尾張旭市役所職員 約30名
開催経緯	本市では、災害により大きな被害がもたらされたことがないため、職員の防災意識が希薄であること、また発災時のイメージを掴むことが難しく、的確な災害対応ができるのかが課題となっている。今回東日本大震災の語り部による講演を実施することにより、災害対応について学ぶこととする。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>本町は、リアス式である三陸海岸のほぼ中央に位置し、古くから豊かな海の資源に恵まれ、それを各時代でうまく活用してきた歴史がある。天正年間には、特産である鮭を活用した「新巻鮭」の開発、それをさらに発展させ、江戸や大坂に運んで財をなした豪商前川善兵衛等、遠い昔から海とともに発展してきた。</p> <p>また、大槌湾には、井上ひさし氏のNHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる蓬莱島が浮かび、同氏の長編小説「吉里吉里人」の「吉里吉里」の名称を持つ地区が町の北部にある。</p> <p>平成23年3月11日の午後2時46分に発生した地震により、大槌町では津波が発生し、死者822人、行方不明者413人、関連死51人の合計1,286人の犠牲者がでた。（令和2年11月30日現在）これは人口の9.4%に達する。家屋の被害は3,878棟（全壊・半壊3,717棟、一部半壊161棟）に及び、全家屋の59.6%が被害を受けた形である。町の職員についても、136人のうち40人が犠牲となった。</p> <p>（2）被害を大きくした要因と当日の対応</p> <p>強い揺れが長く続いたにもかかわらず、すぐに避難しなかったことと、「まさかここまで来るとは」と油断してしまったことが大きな要因であることは否定できない。地震が発生したら津波を警戒することは我々にとっては常識であるが、「きっと大丈夫だろう」という意識が、住民の心に蔓延していたことは事実である。</p> <p>また、高齢化社会が進み、自分で避難できない高齢者の増加、車社会による車での避難（渋滞で避難ができない）、情報化社会の発達による自主的判断力の欠如の影響も否定できない。</p> <p>当日は、勤務時間内においての2号非常配備であり、全職員が動員系統に従って分掌事項の業務内容を遂行するところであった。災害対策本部は、役場庁舎に置かれることとなっており、それが不可能な場合は、仮本部を標高30メートルにある中央公民館に設置することになっていたが、総務課職員、各課の課長、主</p>

幹が参集して組織だった行動に移る前に津波が来襲したため、それぞれの判断で避難行動をとらざるを得なかった。

(3) 発災当日から3週間の対応

多くの職員を失ったこと、全ての書類、機材等が滅失し行政機能が完全に麻痺したことから、防災計画を無視した対処療法的災害対応体制でスタートした。当面は、災害対策本部の業務に当たる職員を除いた職員90名ほどを3班編制として対応した。

災害対策本部では毎日6時と18時に関係機関調整会議を開き、情報の共有に努めた。その他食料物資班、避難所対応班、遺体収容班を設置して業務を進めたが、救助活動や物資の移動のための道路の確保が進み、新たなニーズへの対応や改善が必要となってきたことから、これらに加えて新たに救護班、清掃班、工務班及び水道班を設置した。また、本部機能の充実や遺体火葬に係る証明書の発行等本来業務の遂行のため避難所に配置していた職員を引き上げ、避難所運営についても改善を図るよう協議・指導を行った。

(4) 学校再開に向けて

教職員は、自らも被災して避難所で寝起きしながら、安否不明の児童生徒の情報の入手、卒業式などの年度末対応、心のケアの必要な児童生徒や保護者の把握、学校再開に向けて必要な物品の把握や手配に不眠不休で取り組んだ。その結果、小学校については、被災した4校のうち3校は被災を免れた小学校で、残る1校は隣町にある県の生涯学習施設で再開した。中学校については、1、2年生は被災を免れた中学校で、3年生は町内にある県立高校の空き教室を借りて再開することができた。その後、小学校4校と中学校1校を同一敷地内に仮校舎として建設し、さらに2年後の平成25年4月に、被災した小学校4校は統合して新設校としてスタートした。



開催地より

東日本大震災の体験談、教訓について、スライドを使ってとても分かりやすく聞くことができた。災害対応についてや、行政機能の維持復活についてもイメージを掴むことができたと思う。今後の防災活動に役立てていきたい。